



第18回年会特集 第2弾 ～年会に参加して～

年会に参加された若手・中堅の研究者から年会の感想を寄せていただきました

▶ 今回のエピジェネティクス研究会ではポスター発表に加え、3分間のフラッシュトークに採択していただいたことで口頭発表の機会もいただきました。舞台上で3分間という限られた時間内での発表ということもあり、非常に緊張していましたが、少しでも多くの方に自身の研究の魅力を伝えることができたことを大変嬉しく思います。

私は、学部時代にES細胞におけるDNAのメチル化機構、修士課程では精子や卵の元となる始原生殖細胞やそれに由来する胚細胞腫瘍と絡めながら研究を進めています。本学会においても、各セッションでエピジェネティクスの観点から腫瘍の研究を行っている方が多数参加されており、自身の研究を発展させていく上で非常に有意義な時間となりました。中でも、一般公演に登壇された滝田先生のお話は、自身と共通の研究対象である胚細胞腫瘍が中心であったため印象に残っています。私は主に *in vitro* での研究なので、*in vivo* での胚細胞腫瘍の研究は理解を深める貴重な講演となりました。

また、今回はスタッフとして運営の一部に携わる貴重な経験をさせていただきました。この経験を通して、学会運営の裏側や苦勞の一端を知る機会となりました。その反面、関係者でお揃いのTシャツを着用していたことで、個性溢れる先生や学生の方と接する機会が増え、思い出深い学会となりました。また、ウェルカムパーティーや懇親会では、世代を超えて多くの研究者の方々と親睦を深めることができました。一昨年、去年の北陸エピ研でもお世話になった年会長 沖先生のホスピタリティには大変ありがたく感じております。

北陸エピジェネティクス研究会も併せた3日間で、多くの学びと貴重な体験を得られたことを大変嬉しく思います。最後に、今回の研究会の開催に携わられた組織委員の皆様にご心より感謝申し上げます。



松井 峻亮
関西学院大学大学院理工学
研究科生命医科学専攻
修士課程2年

▶ 私は今回、日本エピジェネティクス研究会に初めて参加させていただきました。これまでは減数分裂期組換えやDNA修復といった分野にいたため、ゲノム情報の変化に依存せず遺伝子を制御するエピジェネティクス研究の奥深さに刺激を受けた2日間でした。

各セッションでは、生物学の基礎研究から医学的研究まで様々な視点からエピジェネティクスな現象を捉えた研究が紹介され、どれも活発な議論が繰り広げられていました。特に個人的に印象に残っているのは、ヒストンタンパク質同士の接触部位のアミノ酸変異によってヌクレオソーム構造が不安定化すると、細胞分化やストレス耐性、老化など、広範な影響が出ることを明らかにした研究です。クロマチンのコアとなるヒストンの不安定によって、ダイナミックなエピジェネティック制御の欠損に繋がり、多様な生物種・細胞種が正常に機能できなくなるという衝撃的な内容でした。その他、ネットワークトポロジーという理論から入って最後にウェットで証明するといった研究も大変印象に残っています。研究手法に関して、ChIP-seqやATAC-seqなどのNGSを使った手法が当たり前のように使われていることに驚き、さらにCut&Runといった新しい手法があることを知ることができたのは大きな収穫でした。また、私は今回ポスター発表もさせて頂きましたが、同じ酵母の研究者だけでなくヒト細胞で研究されている方にも来て頂き、多角的な視点からのコメント、アドバイスを頂くことができ、大変勉強になりました。

最後に、私はスタッフとして裏方の仕事にも関わりましたが、今大会は運営委員会の先生方をはじめ、多くの方々の支えによって成り立っていることを実感しました。改めて感謝申し上げます。



東出 望花
福井大学大学院工学研究科
日本学術振興会
特別研究員 RPD



▶ このたび、福井で開催されたエピジェネティクス研究会に参加し、貴重な経験をさせていただきました。「エピジェネティクスの新たな可能性への挑戦」というテーマのもと、基礎的な分子機構の解明から医療応用まで幅広い講演を拝聴し、エピジェネティクス研究が医学と融合しながら新たな展開を遂げていることを実感しました。特別講演の坂野先生による神経回路と情動行動解析には深く感銘を受け、研究の奥深さを改めて感じました。

私は現在、H3K36メチル化に着目して研究を進めていますが、本会ではその修飾が生殖細胞の成熟や cryptic transcription の制御に関与する可能性など、興味深い知見を得ることができました。一方で、このヒストン修飾の全容はまだ明らかではなく、自らの研究もその「未知」に挑む一端を担っていると実感し、研究への意欲がさらに高まりました。

今回はポスター発表の機会をいただき、「H3K36メチル化とDNA損傷修復」に関する成果を共有しました。DNA修復に焦点を当てていた私にとって、他のヒストン修飾との関連をご指摘いただけたことは、今後の研究の広がりを考えるうえで大きな学びとなりました。学部生の頃、東京大会で聴講した際に「いつか自分もこの場で発表を」と思い描いた夢が今回実現し、大きな達成感を得ることができました。また、北陸エピジェネティクス研究会との合同開催で、初めての口頭発表にも挑戦しました。学生発表ながら非常にレベルが高く、自身の未熟さも痛感しましたが、それ以上に多くの刺激を受けました。

懇親会では福井ならではの料理や地酒を楽しみつつ、普段はなかなかお話しできない先生方と研究や進路について語り合うことができ、有意義な交流の場となりました。このような素晴らしい機会を提供してくださった沖先生をはじめ、組織委員会の皆様に深く御礼申し上げます。次回は千葉大学が主催となり、私も学生リーダーとして運営に携わる予定です。皆様にとって実りある会となるよう尽力してまいります。



岩崎 滉

千葉大学 融合理工学府
先進理化学専攻
博士課程 2年

▶ この度、学部生の頃から目標としておりましたエピジェネティクス研究会年会に初めて参加いたしました。念願であった本学会で、「ヒト特異的ノンコーディングRNAはTDG遺伝子活性化を介してヒト神経幹細胞動態を制御する」というタイトルでポスター発表の機会をいただき、大変嬉しく思います。

今年度のテーマである「エピジェネティクスの新たな可能性への挑戦」の通り、各セッションでは新しい可能性を想起させる発表が数多く披露され、大きな刺激を受けました。特に、熊本大学国際先端医学研究機構 高橋 悠太先生の独自のDNAメチル化編集技術を用いたDNAメチル化の次世代への継承機構に関するご講演は、大変興味深く、深く印象に残っております。また、本学会初の試みであった「フラッシュトーク」では、短い時間で研究の魅力を伝えようとする発表者の熱意と、創意工夫を凝らした発表に圧倒されました。

ポスターセッションは終始活気に満ちており、私も多くの議論に参加することができました。自身の発表では、様々な研究背景を持つ先生方から貴重なご意見やご質問をいただきました。貴重なアドバイスやご質問は、自身の勉強不足や視点の偏りを痛感すると同時に、今後の研究の発展に繋がる多くの課題を発見でき、有意義な時間を過ごすことができました。中でも、先生方からいただいた「面白いね」というお言葉は、何よりの励みとなり、研究活動の大きな糧となっております。さらに、幅広い生物種を対象としたエピジェネティクス研究に触れ、議論できたことも大きな収穫でした。

2日間の研究会を通じて得られた多くの学びや貴重なアドバイスは、私にとって大きな財産となりました。本学会での経験を糧に、自身の研究を一層発展させるべく精進してまいります。本大会の開催にご尽力くださいました先生方、スタッフの皆様にご心より御礼申し上げます。



善野 翔太

広島大学大学院
統合生命科学研究科
修士課程 1年



情報を求めています！！

研究員・ポスドク募集および他の研究会のお知らせなど、ニュースレターを利用して公開してみませんか。年会に関するご意見・ご感想もよろしくお願いたします。お近くの広報委員に気軽に e-mail ください。

(委員長) 近藤 豊 (ykondo@med.nagoya-u.ac.jp)
佐渡 敬 (tsado@nara.kindai.ac.jp)
沖 昌也 (ma4sa6ya@u-fukui.ac.jp)
一柳健司 (ichiyana@agr.nagoya-u.ac.jp)
服部奈緒子 (naoko.hattori@gunma-u.ac.jp)
中山潤一 (jnakayam@nibb.ac.jp)

日本エピジェネティクス研究会事務局

千葉大学大学院医学研究院分子腫瘍学内
庶務担当幹事：金田篤志、担当：江島加余子
住所：〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1
TEL: 043-226-2039
E-mail: jse-jimukyoku@ml.chiba-u.jp